
ツギハギーPiece For Peaceー

能美クドリャフカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツギハギ Piece For Peacer

【Nコード】

N0621L

【作者名】

能美クドリヤフカ

【あらすじ】

全寮制の進学校“神楽学園”に通っている高校生「あかしぎいちゅう暁銀杏」は仲間達と共に普通の生活を過ごしていた。しかしある日、学校に忘れた宿題を取りに夜中侵入すると奇妙な出来事が待っていたのだ…。

【序章】 糸口

「早く学校行こうよーちゃん。」

ゆさゆさと親友の体を揺さぶる少女が言った。

「うっ…。まだ眠い…」

「いーちゃん、と呼ばれた少女…。… 暁銀杏は布団から出ようともしない。

「一日ぐらい休んだって大した事ないよ、蜜柑…。だから今日は…」

「駄目だって。学校休んだっていい事なんてないよ？」

蜜柑は銀杏の事を静かに諭した。

あまり聞こえていなかったかもしれないが銀杏は仕方なく体を起こした。

布団の上で目を擦っている。

「この時期の朝は辛いなあ…」

「一年中言ってるよ、それ。よいしょ…」

蜜柑は素早く銀杏の制服を引っ張り出してくる。

蜜柑自信は既に着替えも完了している。

「早くしなくちゃ朝御飯に間に合わないよ？」

「もうカロリーメイトでいいよ…。お腹空いてないし…」

「駄目だよ。美容と健康に悪いよ?」

「既にだるだるよ…」

蜜柑は困った顔をする。

その間銀杏は顔を洗い、歯磨きに取りかかっている。一応行く気にはなっているようだ。

「每晚毎晩朝の3時までインターネットだのテレビだのを見てるだもの。さすがに体に悪いに決まっているよ、もー……。」「

「全寮制で高校生ならこんくらい普通よ。蜜柑ももうちょっと羽目外しなさいよ。」「

「二人して羽目外したら駄目じゃない。」「

蜜柑は顔を覗き込むようにして言った。「っ!」

さっと銀杏は身を翻した。

顔立ちの幼い蜜柑を見ていると複雑な思いが湧くからだ。

「ほらほら。早く早く。」「

「そんなに急かさないですよ…」

銀杏は蜜柑に背を向けながら言った。

「で、相変わらず朝御飯に遅刻、と。」

銀杏の反対側に座っている銀短髪の少年が言った。

「そろそろペナルティを考えた方がいいのか？このままじゃ、お前遅刻多数で呼び出し喰らうぞ。……………俺達に。」

「好きで寝過ごしてる訳じゃない。」

銀杏は言い返した。

すると、隣に座っている蜜柑が口を開く。

「だったら、もう深夜に寝るのは止めようね？」

それを聞いた別の少年が言う。

「一日三時間睡眠はお前には無理だな。俺ぐらいにならないとな。」

「ならないわよ……」

ちっ、という顔で銀杏が首を振る。

「ふうむ、残念だ。」

「朝からギャーギャー五月蠅いな、蜻蛉は。」

テーブルに座っている一行に向かって語りかけた少女はたった今食堂に入ってきたばかりだった。
ちなみに蜻蛉というのは先程からテンションの高い赤髪の少年の名である。

「ちえ〜。もう久遠が来ちまったのか。」

久遠と呼ばれた少女は微かに笑いながら最初の銀髪少年に話しかけた。

「礎。物理の宿題で一つ解らなかつたんだが、お前はどつだつた？」

「多分解けてないな。物理はイマイチ良く解らなくてよ…。」「物理？何が解らないんだ？」

蜻蛉がやや長めの髪を掻きむしりながら歩いてくる。
男の癖に肩より下まで髪を伸ばし、しかも中性的な顔立ちなため、街を歩いているとたまにナンパされるとか…。

「蜻蛉。あんた解る？」

久遠が言った。

「ちよつとま…………たなくていいな、これは。うん、解けた。」

『早っ！』

全員が口を揃えた。

「なんだよ、そのシンク口率…。これはだな…」

久遠と礎に解法を教え始める蜻蛉。

実は蜻蛉は稀に見る天才の部類だ。どんな教科も隈無くこなし、且つ運動神経もずば抜けている。努力して培ったのではないか、と疑問に思ったが暇な時はノートパソコンを開いて遊んでいる。とても勉強しているようには見えない。

「ほんとと、蜻蛉みたいに頭よくならないかなあ？」

知らず知らずの内に口にしていた。

すると、蜜柑が相手をする。

「黒羽君みたいになるのは無理じゃないかなあ……。いくらなんでも全教科を90点以上取るなんて出来ないよ……。」

愛想笑いしている。まあ、蜜柑も学年の中では常に一桁順位に入っている（無論、一位は蜻蛉）。

かといって银杏や礎、久遠だって悪い成績は取っていない。

全員悪くても学年60位以内には入っている。「今日も皆さんお揃いね。」

また一人席に着いた。

「あつ、お姉ちゃん。」

蜜柑が声を上げた。

姉の名は朱雀。もつと可愛らしい名前が良かった、とか言っている。読書家でブログにオリジナルの短編小説を投稿してる。ペンネームは“檸檬”。……妹の名に微妙に対抗しているようだ。

「体は大丈夫？」

銀杏が朱雀に聞いた。

朱雀は生まれつき病弱なため、ほとんど走る事も出来ないのだ。

「今日は…大丈夫かな…？」

蒼白い顔でにつこりと微笑む。

そんなこんなで少し時間が経つ。

「そんじゃ、行くか。」

礎が突然腰を上げる。

「えっ？ちーちゃんは？」

ちーちゃん、とは今年入学したばかりの戸奈瀬千尋という少女のあだ名である。

いつもはメンバーの誰かと一緒に行動しているのだが今日はいない。

「また、寝坊か…」

「あたし以上にあの子の方が心配だわ…」

蜻蛉と銀杏がはぁ、と息を吐く。

「このままじゃ全員遅刻となる。可哀想だが先に行こう。」

礎がもう一度言つと、全員腰を上げた。

「おはよーなのですよ、皆さん。」

階段付近で白いリボンをした少女が声を上げた。

「ちーちゃん!？」

蜜柑が驚いた。

「そーですけど？蜜柑さん、どーかしたですか？」

千尋が首を捻りながら言う。「いや…。だって、私達さっきまで食堂でちーちゃんの事待ってたんだよ？いつの間に来たの?」

「まあ、大体想像は着くがな。」

久遠が呆れ顔で言った。

「え?いやあ、千尋はいつもどーりに出てきたんですけどね?…」

顔から冷や汗が流れてる。

「朝御飯は?」

蜻蛉が素っ気なく聞く。

「た、食べてき……」

く

「……………」

「……………」

全員黙った。

「食べてないよな？」

再び蜻蛉が聞く。

「食べた気がしたんだけどな……」

「食べてないよな？」

「いやあ、そんな事は……」

「食べてないよな？」

「や、だから……」

「食べてないよな？」

「……………」

「食べてないよな？」

「まだ何も言っていないよ……」

「その辺にしといてやれ、蜻蛉。」

久遠が言った。

「ったく。ほら、カロリーメイト。」

「って言いながらあたしに手を出すな！」

バシッ、と銀杏が蜻蛉の手を叩いた。

だが、その後千尋に渡した。

「おい、お前ら。何してる。」

「ああ、彦一お兄さん。」

「うむ。ちゃんと先生と呼べ、黒羽。」

バシッ、っとノートで軽く頭を叩かれる。

「もうチャイムがなるぞ。早く行け。」

「へいへーい。」

蜻蛉の声と同時に全員各教室に向かった。「遅いですよ！どっしてあなた方はそういういつも時間も時間ギリギリに来るんですか！」

朝からキンキン声を張り上げているのは学級委員長の九段光。

「まあまあ、ひかりん。いつもの事じゃん。だから、いつも通り許してやりなよ。」

と、銀杏達を庇っているのはクラスメイトの御霊湖子。

「悪いわね、御霊さん。」

銀杏がさりげなくお礼を言う。

「なぐに言ってるの。友達でしょ、私達。」

湖子がにかっ、と笑顔を見せた。

「こらー。静かにしろ、お前ら。出席取るぞー！」
彦一が教室へとやって来た。

そして、またいつも通りの一日が始まる。

【一章】 誤謬

「……………」と、言うわけでこの小説を読み始めた君！その時点で間違ってしまったのだ！」

蜻蛉が何か騒いでる。

正直、どうでもいい。

「おいおい、お前ら！何だよ、その顔は！」

「黒羽君。流石にその発言はないと思うんだけど……………」

蜜柑が宥める。

しかし、蜻蛉の元気っぷりも目を見張るものだ。こつ一年中見てたがしょんぼりしてた事なんてなかったんじゃないか。そう思える。

「にしても何でルーピックキューブをやらねばならんのだ。」

礎が片手で攻略しながら、もう片方の手で携帯電話を弄くりながら言う。

確かに理由は不明だ。

「意味もなくやらせてる訳ないわよねえ。」

何となく聞いてみた。

「意味？そんな物求めて何にな……………ゲフッ！」

バキッ、と鈍い音がする。

顔面に拳骨をいれてやった。

蜜柑も「あら〜…」と言いながら、薄笑いしている。礎は全くもって無視。

「意味ないんならやらせないでよ！同じ教室なのにわざわざ電話を掛けてきてさ！何がしたかったのよ！」

言ってから過ちに気づく。

意味がないのだから、やりたかった内容を聞いても無駄であろう。

「……そうだな。確かに無意味な行為だ。だが、娯楽に意味を求めちゃいけない。遊ぶために娯楽がある。その時に生まれる感情は多種多様だ。」蜻蛉の話も分からなくもないが…。

「でも何でルーピックキューブなのよ。娯楽なら他にも沢山あるでしょ？」

「ルーピックキューブを選んだ理由？俺がじゃぱーんちゃんぴおんだからだ。」

敢えて日本人っぽく発音した事に意味はあつたのだろうか…。

「運動は無理だな。放課後だから運動部に全部使われている。」

そう言いながら、礎がルーピックキューブを机に置く。……完成している。

「俺スルーされた!？」

蜻蛉は涙目だった。

「室内で遊べる物って大概つまらないんだがな。何かあるか？」

ようやく礎が携帯電話をズボンのポケットに閉まった。

「将棋とか？」

蜻蛉が碁石を飛ばしながら言う。……台詞と行動が不一致すぎる……

「将棋なんて私分らないよ？」

蜜柑が困った顔で言う。

「んー、そつかあ……。女子もルールの分かる遊び……」

「なんか女子が格下に見られた気分。」

あたしの発言に蜻蛉がつつむ、と唸り声をあげる。

「まあ、その発言は放つといて……。ぬりえならいいか？」

ドゴッ

「ルール存在しねえだろ！」

あのクールな礎がキレた！本気で蜻蛉を蹴り飛ば……そうとした。蜻蛉も足を高く上げて直撃を避けた。

待て……。ルール以前にその発想に対して突っ込め……

「なら太極拳だな……。」

「キツいわ、ボケ！」

すかさず突っ込んだ。「き、きしゃま！太極拳を馬鹿にするのか！」

「そうじゃない！なんでわざわざ疲れてる放課後に太極拳なのよ！」

「俺の脳内辞書は極端だから仕方ない。」

「極端すぎるわ！てか随分と迷惑な頭ね！」

シユツ、とシャー芯を飛ばす。と、それを割り箸（どこから取り出したのか不明）で受け止めた。

「ふっふっふっ……。甘いな諸君。この俺にかすり傷一つつけないひよっこになりおって……」

「いや、最初に拳骨入れましたから。」

「一応言っとく。」

「……………うん、そうだったね……。俺、若年性アルツハイマーなのかな、うん……。おっと鼻から血が……」

なんかすごい落ち込んでる！？

しかし、こうした方が平和なため少し放っとく。

「なにも無理して遊ばなくてもいいんじゃないのか？無駄に体力使うのは愚鈍だ。」

礎は結構人を見下すような発言をする。

「そ、そんな事ないよ。黒羽君は純粹に遊びたいだけだよね？」

蜜柑がフロアを入れとく（ちよつと遅かったが）。

「いや、いいんだよ蜜柑…。俺なんか禿げちまえばいいんだよ…」

なんかヤバい！流石に可哀想だ！

しかし、礎もあたしも救いの手は出さない。

「という訳で解散な。」

礎が席を立った。「おい…。何か一つ忘れてる、と思わないのか？」

蜻蛉が呼び止める。

「？俺は忘れ物ないと思うが…」

「うん、ないよ」

瞬間全員がすつ転んだ。

『なら止めるなよ！』

「いや、だからさ。こう…部屋を出ようとした時に『あれ？俺何か忘れてるような…』って概念に駆り立てられないか？」

「うーん？私は分からないなあ…」

蜜柑は…まあしつかり者だからね。

「お前の言いたい事は分かった。だがなあ、何も今言わなくてもいいだろう？」

「じゃあいつならいいんだ？」

「それは……………」

礎が小さく舌を打つ。

「思い立った事をすぐに行動に移さなければ人間は後悔する。必ずな。言動は迅速に行わなければいけない。人生短いんだ。こういう事も俺はいいと思うがね。」

蜻蛉はそれだけ言うと鞆を持ち、窓から身を乗り出した。パイプ管を伝って降りるつもりのようにだ。

「あいつとは……………」

蜻蛉が完全に去った後、礎が口を開いた。

「昔から友人だが、未だによく分からないな。」

それを言ったらあたし達もだ。この四人＋葵は昔から遊び仲間だった。

ある時五人で夜遅くに星観察に行こうとした時、当然親達から中止にさせられそうになった。

その時、唯一年上であった朱雀が同行、という形で許可された。も

つとも、あの時はまだ今ほど病弱じゃなかったからだ…。だが、確かに蜻蛉はイマイチ良く分からない。家族構成なんかも教えてもらった事がなかった。分かるのは親族の久遠家に引き取って貰っていた事だけだ。葵は蜻蛉にとって従姉でも蜻蛉はあまり一緒に居たがらない。それもよく分からないのだ。久遠家は別に虐待をしている訳でもないらしいからだ（本人等談だが）。それなのに従姉である葵と一緒に居るのを嫌がるとういう事なのだろう…。

「ま、考えすぎは毒だ。」

ずっと黙っていたあたしの思考を見透かすようにして礎が言った。

「今日は帰ろう。…っとメールか。……………わりいな。ちよい野暮用が出来たから先に帰るわ。」

「うん、分かったよ。それじゃあまた夕食の時だね。」

「ああ、じゃあな。」

そう言って礎と別れる。

「じゃあ、お姉ちゃんの迎えに行こう。」

蜜柑が屈託ない笑顔で言った。

…この子は眩しすぎる。人を疑うなんてできない純粹無垢な子…。ほんつとに可愛らしい子だ。

そんな事を考えながら図書室に向かった。

「あら？今日は礎君達はいないのね。」

図書室に着くと朱雀は本を読んでいた。いつもの事だ。病弱な朱雀は一日の大半をここで過ごしている。

……まあ基本静かだしね、ここ……。図書室を後にして三人で玄関に向けて歩き出す。

「随分とお疲れね。」

朱雀が微笑しながら言う。

やはり姉妹揃って中々いい笑顔だ。

「蜻蛉といると無駄に体力使うのよね……。」

「それに合わせてるいちちゃんもどうかと思うけどね。」

蜜柑があたしに向けて言った。

「ま、あいつじゃないけど……。やっぱり昔からの仲だからね。そんなけ。」

「ホントにそれだけ？銀杏は不器用だから大体心の中は分かるわよ？」

朱雀がニヤニヤしながら言う。この人は……。病弱だが性格はかなりS。

いや、蜜柑が優しすぎるだけか。ウノとかだと朱雀はバンバンリバーズやスキップを使うし、トランプだと確実に勝ちにくる。

そして、罰ゲームとしてあたしとかの顔を本で叩く……。

「思い出したらなんか凄く憎くなってきた…。」

「あら？心外ね。」

クスクス笑いながら言う。

前言撤回。この人の笑顔からは黒いオーラしか出てこない。

「あら？魔理ちゃん？」

朱雀が目の前を通りすぎた生徒に声を掛ける。

「ああ、朱雀。」

腕に“生徒会”の腕章をした女子がこちらに振り向く。

彼女の名は“桂 魔理亜”。

朱雀のクラスメイトだ。

「こんな時間まで生徒会？」「そーなの。もー水泳部に所属してるとて事忘れそう。」

魔理亜が低いトーンで言う。

瞬間朱雀の目が輝く。

まさか…

「まあ、そんな日もあるわ。気にしちゃダメよ？」

「うわーん！そんな日が毎日続いているのよー！」

とうとう魔理亜が泣き出した。なんと弱い会長だこと…

「よしよし。」

その背中を撫でてしている朱雀。
ホントに病弱なのか…？

「曉せんぱーい！」

後ろから誰かに飛び付かれる。まあ、想像はつくけどね…

「千尋…。重い！」

手刀で体に回されている腕を叩き落とす。

「ぶぎゃっー！」

いや、なぜ顔から落ちる…

「ちーちゃん大丈夫？」

蜜柑が千尋に駆け寄る。

なんかスゲー心が痛いつす…

「イテテテ。手刀は酷いですよ、せんぱーい…」

「先輩って言わんでよろしい！」

毎回毎回校内で出会う度にこうやって抱きつかれてはたまったもん
じゃない。

そっちの気があると思われてしまうっ…。

「そんな事より夕食に行きましょう？」

「へいへーい。」

何となく言ってみた。

……バシーン！

…本で頬を叩かれた。

「いったあ……」

赤くなっただいそうだ…

「はあっ…はあっ…。もっと…もっと悲鳴を上げて…」

もうこの人の事を逮捕したい、本当に…。「打たれた理由が良く分からんのですけど!？」

「……ふっ」

「こええええええ！」

食堂に着くと魔理亜は水泳部のミーティングがあるから、と別れた。よって今席に着いているのはいつものメンバーだ。

「というわけで今からゲームをしようと思う。」

「いや、前置きなんか言えよ。」

一応礎が突っ込んでく。

「実は今日の献立の野菜スープ。普通はキャベツとかで作られた緑色スープだが、全校生徒の中から不運の子が一人選ばれる。」

「俺達限定じゃないのかよ!？」

「そんなのつまらん。大体考えてみる。もし当たったら1000分の1の確率だぞ?もしかしたら宝くじが当たるかもしれないほどの強運の持ち主だ!」

「お前最初に不運の子、って明言したよな!？」

礎がさっきからヒートアップしてる。

「さて、では早速取りに行こ……」

ガタン

「うぼがああああああ!」

誰か走り去った。

「……………」

「……………」

「…つまらん奴め」

「いや、巻き込んだお前が悪いからね!？」

言ってみる。

「違う。当たってくれたのは別にどうでもいい。もっとマジなりア
クションが欲しかった…」

「一般生徒に求めるな!」

「あーあ、つまんねーの…!」

蜻蛉が椅子をガツタンガツタンしながら言う。「ちなみに聞いとく
けど何のスープだったの?」

「青汁をじっくりコトコト煮込みました」

「ちよつと待てええええええええええ!」

「健康にいいじゃないか。」

「それを飲んだ生徒に敬意を。」

礎につられて皆で敬意を示した。

「そーいえば、今日は何かして遊ぶんですかー?」

千尋が伸びきった声で聞いてきた。

「申し訳ないが外せない用事ができてな。」

「お前もか蜻蛉。」

礎が驚いたように言った。

「ああ…。何だ？こう…口にしたら恥ずかしい場所にも行ってくるのか？」

「バカ言つな。俺はそういうものにまるで興味がない。」

「まるで興味がない、って…。いや、いいんだけどよ。お前本当に年頃の男子高校生か？」

「そーいとお前はどつなんだ？」

「美少女年下胸板 が条件だ。」

「……………1、1、0……………」

「こら待て、表現の自由だ。」

「君には失望したよ！」

「ほー、今更か…」

「認めた!？」

朱雀が呆気にとられた。

「自覚症状あるだけ酷いな。」

あたしも正直ドン引きだ。

「何だよー、別にいいだろ。世の中B L B Lうるさいからな。」

「だからってロリ宣しないで下さい。」

千尋も言った。

「わーったよ。そんじゃちよっくら行ってくるか。」

それだけ言うと蜻蛉は食堂から去った。あたし達もその後いくらか駄弁った後それぞれの部屋に帰った。「やれやれ…。あいつ捕まらないか心配になってきた…」

「だ、大丈夫だよ！黒羽君、そこはちゃんと節度ある行動するよ！……多分」

最後の付け足しが異常なほど声が小さかったが気にしない。

「さて、そんじゃま早速宿題を終わらせますか！」

「うん！勉強することはとってもいい事だよー。」

蜜柑が少しゆったり声で言った。

……………あれ？

「……………ノート学校に忘れたかも……………」

「ええっ!?!」

ヤバいなあ…

よりによって日本史のノート忘れるなんて…。

「あの先生宿題忘れるとうるさいからなあ…」

「葵ちゃんの所に行って借りてくる?」

「担当の先生が違うから無理だよ…、参ったなあ…。」

既に夜間外出禁止時間に入っている。どうせ見廻りもほとんどいないだし…

「取りに行くってくる。」

「ええっ!?!?だ、駄目だよ!それくらいなら私のノート使つてよ!」

「いやあ…。気持ちだけで十分だよ、蜜柑。そんじゃ行ってくるよ。時間もまだ9時だし消灯時間までには余裕で帰ってこれるよ。」

流石に2時間あるから大丈夫だろう。でも蜜柑はそれでもおろおろしている。

その困った素振りが続いている可愛らしい小動物の顔を引き寄せて口を奪う。「え!?!?いや…んっ!」

ちゅ…んく…

舌を少し入れる。流石に全部を入れる訳にはいかない。そんな事したらこの子にとっての“初めて”を全て奪ってしまいそうだ。

うぶなこの子にとっては十分すぎる口封じだ。まあ、あたし自身も

結構気分はいいのだが…。今日はこのくらいにしておこう。

「別に死ぬ訳じゃないんだからさ…。そんなに心配しないでよ。」

「うん…。分かった…。早く帰って来てよ…。？」

目をうるうるさせながら下から顔を見てくる。

ぐはぁっ！同性であるあたしでさえも見事に一発KOとなる反則級の顔だ。

この子と付き合う事になった男はとんでもなく幸せになれるだろう！羨ましいものだ。

……これ以上続けると当初の目的を忘れてしまいそうだったから部屋を後にした。

「…と、確か玄関にはセキュリティの監視カメラがあったな…」

以前蜻蛉と葵の三人で忍び込んだ時に教えてもらった。あの時は非常階段で屋上まで登って天窓から侵入したっけ？

だが、あの時はロープがあったからできた技だ。今はないから…

「二階の西校舎の廊下の窓がセーフだったな。」

「そうね…。えっ？」

振り向くとクラスメイトの金城鷹きんじょうたかがいた。「気にするな、ただの散歩だ。」

「夜間外出禁止時間過ぎてるよ?」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ。」

「う……。あたし急いでいるから先行くね。」

「ああ。気をつけてな。」

「よいしょつど。」

何とか校内には侵入できた。後は教室まで行けばいい。

「おっと！教室行くんだから鍵が必要だな。」

この学園では移動教室の時などは鍵を掛ける。迷惑な事だが。

「て事は宿直がいる所に突っ込むのか…」

気は進まないが仕方ない。トイレに行った時とかの隙を見て取るしかない。

ひとまず職員室に行くとしよう。

「あれ？」

職員室の明かりが消えている。宿直の先生寝たのかな？
まさかね…

「失礼しまーす。」

一応言ってみる。返事はない。
薄暗い教室を歩きながら鍵を取りに行く。

「……変なの。」

とりあえず助かった。後は教室に行くだけだ。
と、その時だった。

ガタン

「ひ！？」

何かが動いた音がした。
もしや宿直の先生が起きたのだろうか…？
しかし、次の音は来なかった。

「な、何なの…。一体…。」

急いで教室に向かおうと前を振り向いた。

「！？きゃあああああ！」

目の前には得体の知れない生物がいた。いや、蜻蛉の無駄話の時に出てきた神話上の生物じゃないか？確か、グリフォンだったような…

「ってそんな事考えてる場合じゃない！」

グリフォンから離れようとしたが、声で刺激してしまったのか飛び掛かってきた。

ああ、死んだ…「どけっ！」

諦めかけていた時だった。

どこかで聞いた事のある声の持ち主が赤い長髪を揺らしながら目の前を駆け抜けていった。

あたしを後ろに引つ張りその勢いで更に加速し、グリフォンとの間合いを詰める。

向こうも飛び掛かってきた最中だった。その時蜻蛉が腕に付いている拘束具をグリフォンに向けた。見ると、鋭利な刃物が付いていた。グリフォンの爪を受け止めると腕力でグリフォンを職員室外まで吹っ飛ばした。

「……………何でここにいる？」

こっちに振り向いたのは蜻蛉だった。紛れもなく蜻蛉だった。腕には刃物の付いた拘束具を填めているが。

「……ノート忘れたから取りにきた……」

「はあ!?!」

蜻蛉は呆れた顔で言った。

「お前という奴は……。よりによって今日かよ……」

「ねえ! さっきのアレは何!? 一体どうなってんの!?!」

自分でも分かるくらい気が動転していた。

「落ち着け喚くなそして押し黙れ。」

最後の二つ同じ意味だね……。そんな事言えないけど。

さっきのグリフォンはドアごと吹っ飛ばしたものの、死んでいるとは思えない。

「とりあえず話はあいつを片付けてからでいいか?」

こくっ、とあたしは頷いた。

「安心しろ。すぐに片付ける。こんな雑魚…瞬殺できなきゃクズになっちまう!」

あっ、そ…「来る!」

あたし武器持ってませんけどね。

先ほどのグリフォンがけたたましい咆哮をしながら駆け寄ってきた。蜻蛉も迎え撃つようにして近づいた。

「遅い！」

刹那、蜻蛉の姿が消えたと同時にグリフォンがバラバラにカットされていった。即死だろう。

「ちっ。汚ない血付けやがって。返り血が胸に飛びかかっていた。」
量はあまり多くないが明らかに何かを殺した痕が窺える。

「ほら。さっさと行くぞ。」

「え？ど、どこに？」

「教室行くんだろ？」

そうだった。そうだったけど…

「俺が護衛に付く。そしてお前はとつと寮に帰れ。俺だっけとってお前を無傷で守り通すのは難しいからな。」

「…分かったわ。行きましょ。」

途中変な生物とは逢わなかった。

「ねえ、蜻蛉。これは何なの？悪い冗談？」

「アホ。全部事実だ。」

「まだ受け入れがたいんだけど…」

「こんなものをすぐに受け入れる方がおかしいだろ。」

それもそうかもしれないけど…

「あいつらは“虚像世界”から具現化されたモンスターだ。」

「“虚像世界”？」

「この学園を中心に不特定の範囲内に結界が張られている。その範囲内、即ち結界内だと何処からでも行けるパラレルワールド、それが“虚像世界”だ。」
「でも今までこんな事はなかったわ。」

「そりゃそうだろ。奴らに会うには虚像世界に行くしかないからな。」

「……………？どういう事かさっぱりなんだけど。」

「あいつらは自ら現実世界に現れるような真似はしない。俺みたいな人間が虚像世界に行って殺し損ねたのが大抵こっちに迷い込む。」

「殺し損ねた奴だったの！？今の！？」

瞬殺できてないじゃん…

「違う。アレは俺が殺した奴じゃない。俺は今日はマンティコアを狩っていた。」

そっちの方が強そうだね…。

だがおかしくないか。それはつまり、この学園内には蜻蛉と同じ事

をしている輩がいる事を示している。

「着いた。とつとと持ってこい。」

分かってる…。一旦考えるのはよそう。素早く机の中から日本史のノートを取りだし入り口まで戻る。

「よし、寮まで行こう。」

「鍵は？」

「俺がやっておく。」

「…分かった。ありがとう。」

「礼を言っている暇があったらとつとと帰るぞ。」

玄関まで早歩きで向かう。

「ねえ、さっきの話だとこの学園内にも蜻蛉と同じ事をしている人間がいる、って事だよね…」

「そうだな…。あまりいい気分じゃない。」

「…もう一つ。なんで蜻蛉はこんな事を？」

「それは……………」

その時だった。「！敵襲！」

「うひゃっ!?!」

間抜けな声を出してしまった。

蜻蛉がいきなりあたしの事を抱き抱えてハイジャンプしたのだ。外で良かった…。

中でこんなに高くジャンプされたら脳天がち割れるわね。

「軽く10メートルは越えてるな。」

「ええっ!?!」

「ぐっ…。現実世界でこの力使うと流石に堪えるな…。」

「こんなにジャンプする必要は?」

「下見ろ、下。」

「下?」

見ると、地面が火の海と化していた。

……………えっ!?!

「ちょーつとヤバいな…。早いところお前を帰さなくちゃな…。とりあえず木の上に。」

蜻蛉は火からある程度離れた木に止まった。

「ここからはお前一人で帰るんだ。」

「どっしって?」

ムスツとして返す。

「敵はおそらく一人だ。俺がそいつを片付ける。その際に早く戻れ。」

「やるしか…ないのね。」

「ああ…。俺は行く。」

それだけ言うと蜻蛉は地面に降りると火の海の方へと駆け出した。

「あたしも…行かなくちゃ…。」

木から降りるとあたしは逆方向に向けて走り出した。
なんでこんな事になったんだ…。どうしてこんな事になったんだ…。
分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない…。

ドンッ

「きゃっ!」

無我夢中で走っていたから気がつかなかった。

そこに…人がいるなんて…。

「こんな時間に歩いているとは…。いけない生徒ですね。」

奴はそれだけ言うと手をかざした。途端、眠気が襲ってきた。

あたしは気絶した。(蜻蛉サイド)

さて、さっきの火の元はどこにいったかな？

「おほっ！いるねえ！」

わざと声を出して敵の注意を煽る。少しでも銀杏の奴の時間稼ぎになるならば…

「自ら声を出すなんて頭おかしいんじゃないの？」

その声の主が現れた。

案の定、奴の右腕には火炎放射機が詰められていた。恐らく右腕は無いのだろう。愚かな…。

「随分とまあ派手に暴れてるねえ、現実世界でよお…。」

「わざわざ虚像世界で戦う必要もないだろう？あっちには人間はいないがこっちにはいるんだからな。」

金髪にピアスって…

いつの時代の不良を気取ってるんだ、この野郎は。

「その制服…。ウチの学校か。」

「ああ、そうだけ。意外だろ？俺のような奴が学校にいるなんて思った事もないだろうよ。」

「授業に出とらんクスなど覚える価値無しだな。」

「あんだと!？」

単細胞が…。

「この俺、“小早川晃”様が相手してやるよ！」

「へー、そ。悪いが…」

刹那、奴の背後に回る。

「早い…!？」

「違う…」

喉元をかつ捌く。

「げはあっ！」

返り血を大量に浴びる。

「ふむ。頸動脈が切れたか。」

「……………」

「ふん。声も出せないだろっ？今すぐ楽に…」

違う…!

畏だ!「死ねっ！」

危ない!ギリギリ回避したか。

「ちっ、外したか…。」

奴の喉元を見る。

バカな！傷が跡形もなく再生しているだと！

「お前なんか俺達“CORPSES”^{カープス}は倒せないぜえ。」

CORPSES…。屍達か…。

「余興は終わりだ。次は確実に焼き払ってやるよ。」

「ちい！」

何故だ！？何故こいつは死なない！？

「喰ら…」

その時、鐘が鳴った。

「何…だ？」

「ちっ、タイムアップか…。お前、次は殺してやる…」

捨て台詞を吐き、奴は消えた。

「はあ…はあ…。…銀杏は！？」

電話する

出ない…

「まさか！」

駆け出す。

女子寮へ逃げ逃げ逃げ…

「いた！」

倒れているが死んではない。

「おい！しっかりしろ銀杏！俺だ！蜻蛉だ！目を覚ませ！」

俺が浅はかな考えを出してしまったから…。

「起きろ銀杏！死ぬんじゃない！許さねえぞ、馬鹿野郎！」

涙が頬を伝う。

あれ…。おかしいな…。

ロクデナシとは言え、血の繋がったあいつらが死んだ時は涙なんて流れなかったのに…。他人の銀杏が目を開けないだけで涙が出るなんて…

「ん…」

「！おい！起きろ！俺だ！」

良かった！死んじゃない！

「あなた誰…？」

世界が凍った。

そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621/>

ツギハギ―Piece For Peace―

2010年12月9日06時31分発行